

「tei (体)」考

市 井 外喜子

A Study of “tei”

Tokiko Ichii

- 1 題目 「tei (体)」考
- 2 氏名 市井外喜子
- 3 英文題目 A Study of “tei”
- 4 ローマ字氏名 Ichii Tokiko
- 5 要旨 天草版平家と古典平家の特徴を「tei (体)」を通して、吟味したものである。
日本語の「体」の持つ「文脈から帰納されるところを、形式名詞的に集約していう」
はたらきを、天草版平家ではローマ字表記の利点を生かし、「:」+「tei 文」とする
点が注目される。「tei」を巡る表記上・表現上の工夫が独創的である。
- 6 目次 一 はじめに
二 tei ≠ 体
三 tei = 体
四 「:」+「tei 文」
五 tei 文挿入
六 おわりに (まとめとして)

一 はじめに

天草版平家物語と古典平家物語を読み比べ、天草版平家物語の特徴について、今まで数回にわたって報告を行ってきた。近年の報告論文を「日本文学研究」から示すと、次の通りである。

。語彙を巡って

VOZOI ノート 2001年 第40号

VOTOTOI ノート 2003年 第42号

天草版平家物語と対称詞－右馬の允と喜一検校の関係から－ 2004年 第43号

Iza vofin nafarei 2006年 第45号

。依拠本を巡って

天草版平家物語卷第四第八章段小考－依拠本をみる－ 2005年 第44号

天草版平家物語卷第四第二十章段小考－依拠本をみる－ 2007年 第46号

これらの論文の他に、次の著書がある。

『天草版平家物語私考』新典社 2000年 単著

『天草版平家物語私考 続』新典社 2005年 単著

『天草版平家物語研究』おうふう 2007年 共著

今回は天草版平家物語と古典平家物語の特徴を、「tei（体）」を通して観察し、報告することにした。

使用した『平家物語』は、次のものである。

- 1 国会本 新潮日本古典集成 『平家物語』新潮社
- 2 斯道文庫本 『百二十句本平家物語』汲古書院
- 3 屋代本 『屋代本高野本対照平家物語』新典社
- 4 鎌倉本 『鎌倉本平家物語』古典研究会
- 5 竹柏園本 『平家物語 竹柏園本』八木書店
- 6 高野本 新日本古典文学大系『平家物語』岩波書店
- 7 葉子十行本 日本古典全書『平家物語』朝日新聞社
- 8 流布本 『平家物語』おうふう
- 9 延慶本 『延慶本平家物語』勉誠社
- 10 長門本 『平家物語長門本』名著刊行会
- 11 小城本 『小城鍋島文庫本平家物語』汲古書院（斯道文庫本欠巻部分を補う）

なお天草版平家は、『天草版平家物語対照本文及び総索引』（江口正弘著 明治書院）を使用する。

「tei」の出現状況の例を巻第一第四章段（重盛父の清盛に成親卿を害せられぬやうに、教訓をせられたこと、p34）で示してみる。

日の暮れゆくにつけても、成親卿の露の命この夕を限りぢやとをもちやるるにも消え入る心地であった。その宿所の tei^①を言うに、女房侍多かったれども、ものをさえとりしたためず、門をだにもをしもたてず、（中 略）近いあたりの人わものをさえ高う言わず、をちをそれてこそきのうまでもあったに、夜の間にかわる tei^②楽しみつきて、悲しみきたると、ある人の書きをかれたも、今日の前に知らるる tei^③でござる。

当該箇所を高野本巻第二小教訓（p87）で示すと、次の通りである。

暮行陰を見給ふにつけては、大納言の露の命、此夕を限りなりと思ひやるにも消えぬべし。

宿所^①には女房・侍おほかりけれ共、物をだにとりしたゝめず、門をだにおしも立ず。(中略) ちかきあたりの人は、物をだにたかく言はず、おちおそれてこそ昨日までもありしに、夜の間にかはるありさま^②、盛者必衰の理は、目の前にこそ顕けれ。「楽尽きて悲来る」とかゝれたる江相公の筆の跡、今こそ思知られけれ^③。

天草版平家に見られる「tei」を、高野本において対比すると、次のようになる。

天草版	高野本
①宿所の tei	① 宿所には
②夜の間にかわる tei	② 夜の間にかはるありさま
③目の前に知らるる tei	③ 今こそ思知られけれ

天草版平家に3例見られる「tei」は、高野本では「体てい」と対応していない。一般的には、天草版平家の語句の多寡を見ると、天草版平家<古典平家の傾向が見られる。「tei」に関しては、天草版平家>古典平家の様相を示している。「tei」の出現度は、天草版平家39>高野本平家21である。

以下、「tei」の頻度から得られる天草版平家の特徴について述べることにする。

古典平家の資料は高野本を第一資料とし、必要に応じて諸本の平家を示すことにする。

(高野本引用部分では、権勢をふるった成親が没落するさまを「盛者必衰の理は、目の前にこそ顕れけれ」とする。天草版では、冒頭ですでに「盛者必衰のことはりをあらはす」相当部分は排除されている。ここにおいても同じく除かれることになる。)

二 tei ≠ 体

まず最初に、前述の例にあげたような天草版平家の「tei」が、高野本では「体」として対応を示さないものについて見ることにする。

このようなパターンを多く持つ巻第一から具体例をあげる。天草版平家と対比する古典平家は、高野本とする。

- 1 院の御所にめしつかわるる公卿殿上人、北面にいたるまで宝、位、みな身にあまるばかりの tei であったれども、人の心のならないなれば、なをあきだらいで、(巻第一第二 重盛の次男関白殿え狼藉をなされたこと：これ平家に対しての謀叛の根源となったこと。)
- 1' 院中にちかく召しつかはるゝ公卿・殿上人、上下の北面にいたるまで、官位・俸禄皆身にあまる計なり。されども人のこゝろのならひなれば、猶あきだらで、(巻第一 殿下乗合)
- 2 衣装がなければ、人にも似ず、食するものもなければ、ただ殺生のみを先とする tei ぢゃ。(巻第一第八 成親の最後のこと：その北の方都にて尼になりかの後世をとむらわれたこと、並びに少将かさねて鬼界が島え流され、そこで康頼や、俊寛やなどと憂き目をしのがれ

たこと.)

2' 衣装なければ人にも似ず。食する物もなければ、只殺生をのみ先とす。(巻第二 大納言 死去)

3 幼い人々のあまりに恋かなしまるる **tei** わが身も尽きせぬ物思いに耐え忍ぶべうもないと書かれたれば、(巻第一第八 同上)

3' 「おさなき人々のあまりに恋かなしみ給ふありさま、我身も尽きせぬもの思にたへしのべうもなし」なんど、かゝれたれば、(巻第二 同上)

4 幼い人々も声々に泣き悲しまれた **tei**、申すもをろかぢや。(巻第一第八 同上)

4' おさなき人々も、声々になきかなしみ給ひけり。(巻第二 同上)

5 さて成親卿の侍ども宿所え走り帰って、この由を告ぐれば：北の方以下の女房たち声も惜しまず泣きさげばるる **tei**、まことにあわれにあった。(巻第一第四 重盛父の清盛に成親卿を害せられぬやうに、教訓せられたこと.)

5' さる程に、大納言の供なりつる侍共、中御門烏丸の宿所へはしり帰って此由申せば、北の方以下の女房達、声もおしまずなきさけぶ。(巻第二 小教訓)

上記の天草版平家「**tei**」は、高野本では「体」と対応を示さない。したがって「**tei**」の出現度は、天草版平家>古典平家となる。また上記の「**tei**」は、高野本の2文を1文に長文化する**tei**であったり、高野本の語句を**tei**に変えたり、文末に**tei**を加えたりしている。このような単純な「**tei**」(例文1・2・3)に対して、例文4・5は高野本を基底に置き、新たな「**tei**」文を加えている。例文4では、「泣き悲しまれた **tei**、」+「申すもをろかぢや」となり、例文5では、「泣きさげばるる **tei**、」+「まことにあわれにあった」となる。ともに評語文を加えているところに天草版の特徴を見ることができる。

このような巻第一に出現する「**tei**」と ニュアンスが異なる「**tei**」を巻第四から2例示すことにする。

6 寿永三年正月一日のことでござるに：院の御所わ大膳の大夫が宿所西の洞院であつたれば、御所のていもしかるべからんところで、礼儀を行われうずることではなければ、よろづ政もなう、もの寂しい **tei** でござつた。(巻第四第二 範頼、義経木曾が討手に上らるること：同じく梶原には摺墨、佐々木にわ生食とゆう馬を下されたこと：並びにかれら宇治川の先陣を争うたこと.)

6' 寿永三年正月一日、院の御所は、大膳大夫成忠が宿所、六条西洞院なれば、御所のていしかるべからずとて、礼儀おこなはるべきにあらねば、拝礼もなし。院の拝礼なかりければ、内裏の小朝拝もおこなはれず。(巻第九 生ズキノ沙汰)

高野本「院の拝礼なかりければ、内裏の小朝拝もおこなはれず。」は、天草版「よろづ政もなう、」に対応し、このような状況が「もの寂しい **tei** でござつた。」と加筆されている。天草版平家の工夫がみられるところである。

7 平家わ讃岐の国屋島の磯に送り迎えて、年の始めなれども、元日元三の儀もことよろしからず：先帝のござれば、主上と仰ぎ奉れども、よろづの礼儀、節会も行われず、世は乱れたれども、さすが都でわこれほどまでわなかったものをとあわれな tei でござった。（巻第四 第二 同上）

7 平家は、讃岐国八島の磯にをくり迎へて、年のはじめなれども、元日元三の儀式事よろしからず。主上わたらせ給へども、節会もおこなはれず、四方拝もなし。鯨魚も奏せず、吉野のくずも参らず。「世乱れたりしかども、みやこにてはさすがかくはなかりしものを」とぞ、おのおのたまひあはれける。（巻第九 同上）

前掲例文6（巻第九冒頭）に続き、この例文7が来る。天草版「よろづの礼儀、節会も行われず」は、高野本「節会もおこなはれず、」以下に対応し、このような状況が「あわれな tei でござった。」と加筆がみられる。例文6の「もの寂しい tei」から、例文7の「あわれな tei」へと、天草版の「tei」が注目される。「tei」の出現度が高野本に比して、天草版に多いというだけではなく、巻による「tei」の表現上の差異が認められる。

天草版に出現する tei を各巻ごとに示すと、次のようになる。

	巻第一	巻第二	巻第三	巻第四	計
tei の度数	16	0	3	6	25

天草版平家全体に出現する tei の総数は、39である。その中で古典平家（高野本）と対応を示さないものが25例あり、その半数以上が巻第一に出現している。その巻第一の tei は、古典平家本文を基底とする単純なものが多い。巻第四の tei は出現度数では巻第一に次ぐが、表現上の工夫がみられる tei である。本文の内容に密着した新たな tei が注目される。

（高野本引用部分：生ズキノ沙汰冒頭部は、寿永三年正月のはじめて都をはなれた地で迎える平家の零落ぶりからはじまる。）

次に、高野本に見られる「体」について、ここで見ておきたい。

高野本には21例の「体」が出現している。21例中、天草版「tei」と一致するものは、4例にすぎない。一致数が少ないのは、天草版平家にとりいれられていない高野本の章段が多いことも原因の一つである。たとえば、天草版巻第一は高野本巻第一～巻第三に対応しているが、小教訓を除く、医師問答・法印問答・行隆之沙汰は削除されている。また「体」も通常の「体」である。（事の体・当世の体・此地の体・おなじ体等）

高野本21例の「体」の出現箇所を表にまとめて、示しておく。

卷	高 野 本	天 草 版	卷	高 野 本	天 草 版	卷	高 野 本	天 草 版
二	小教訓	卷第一・三	六	慈心房		八	猫間	卷第四・二 卷第四・十二
三	医師問答			祇園女御		九	生ズキノ沙汰	
	法印問答			横田河原合戦			越中前司最期	
	行隆之沙汰			〃		十	千手前	
四	源氏揃		七	平家山門連署			維盛入水	
	山門牒状	卷第二・四		主上都落		十一	大臣殿被斬	
五	都遷			忠教都落		十二	六代	
						合計	21	4

三 tei = 体

前述の二 tei ≠ 体 では、tei の出現度数が古典平家（高野本）に比して、天草版平家に多いこと、また、天草版平家の tei 出現特徴について見てきた。この三 tei = 体 では、前述高野本では tei = 体が 4 例しか見られなかったため、葉子十行本・国会本・斯道文庫本を加え、古典平家 4 本と天草版平家との tei = 体の出現度数に注目し、観察を行うことにする。

tei	体						
天草版	巻	高野本	葉子十行本	句	国会本	斯道文庫本	
巻第一・三	2	小教訓	○ 2 小教訓	○ 13 多田の蔵人返り忠	13 多田蔵人還忠		
巻第二・四	4	山門牒状	○ 4 牒状	○ 35 牒状	○ 35 牒状	○	
巻第四・二	9	生ズキノ沙汰	○ 9 宇治川	○ 81 宇治川	○ 81 宇治川	○	
巻第四・十二	10	千手前	○ 10 千手	○ 94 重衡東下り	○ 94 重衡東下	○	
巻第四・八	9	越中前司最期	9 坂落	88 鴨越	○ 88 鴨越	○	
巻第四・十八	11	先帝身投	11 先帝身投	105 早鞆	○ 105 早鞆	○	
巻第二・一	1	祇王	1 妓王	5 義王	3 義王	○	
計			4	4	5		6

上に示した整理表は、tei = 体の出現箇所と、度数を記したものである。この整理表からは、古典平家 4 本における tei = 体の出現度数に異なりが見られる。高野本・葉子十行本グループ（度数ともに 4）と、国会本・斯道文庫本グループ（国会本 5，斯道文庫本 6）に分れることが注目される。覚一系統本と百二十句系統本による異なりである。tei = 体の一致度では斯道文庫本が、天草版平家に最も近いことになる。

整理表の tei = 体の様子を、二区分して具体的に見てゆくことにする。表現上・表記上の特徴に注目すると、第一のグループは①外観や態度などからそれと見てとれる、そのものの具体的な様子や様態の「体」、第二のグループは②文脈から帰納されるところを、形式名詞的に集約するという「体」、このグループには「tei = 体」の前に「：（コロン）」が置かれる。

天草版平家・古典平家の具体例を見る前に、辞書記述の「体」について見ておきたい。区分わけに使用した①・②は、『時代別国語大辞典 室町時代編』によるものである。①の出典例は数多くあるが次例を引用しておく。

- 。天正狂なるこやるこ 「さてもうき世のていをつくづくとおもん見るに、風の前のともし火、でんくわう、朝露、石の火……夢まぼろしのごとくなり」

②は、下記の二例が示してある。

- 。三国伝記十一 「我故ニ御事ヲサヘ見失ヒ給シ事社彌々心苦敷ケレ。サレバ此ノテイハ思寄ナキニ似タリ」
- 。狂言六義かく水 「たれにはよるまじい、哥道のすぐれた人をむこにとらうと存ずる。則此ていを高札にうたばやと存ずると云て、高札を打」

まず第一のグループ①外観や態度などからそれと見てとれる、そのものの具体的な様子や様態の「体」を見る。

①に属するものには、4例の「tei = 体」がある。具体例の記述順は、1 天草版、1' 高野本、1'' 国会本とする。高野本は覚一系統本の代表として、国会本は百二十句系統本の代表としてとりあげる。

- 1 三井寺にわ貝鐘を鳴らいて大衆どもがをこつて僉議したわ、近日世上の tei を案ずるに、仏法も王法も衰微する。このたび清盛が悪逆を戒めぬならば、いつの日を待たうぞ？（巻第二第四 三井寺にわ長僉議をして、夜を明いて夜討ちをしそこなうて、道からもどったこと。）
- 1' 三井寺には貝鐘ならいて、大衆僉議す。近日世上の体を案ずるに、仏法の衰微、王法の牢籠、まさに此時にあたれり。今度清盛入道が暴悪をいましめずは、何日をか期すべき。（巻第四 山門牒状）
- 1'' 三井寺には、貝鉦をならし、大衆おこつて僉議しけるは、「そもそも、近日世上の体を案ずるに、仏法の衰微、王法の牢籠、今度にあたれり。いま清盛入道が暴悪をいましめずんば、いづれの日をか期すべき。（巻第四第三十五句 牒状）
- 2 寿永三年正月一日のことでござるに：院の御所わ大膳の大夫が宿所西の洞院であつたれば、御所の tei もしかるべからんところで、礼儀を行われうずることではなれば、（巻第四第二 範頼、義経木曾が討手に上らるること：同じく梶原には摺墨、佐々木にわ生食とゆう馬を下されたこと：並びにかれら宇治川の先陣を争うたこと。）
- 2' 寿永三年正月一日、院の御所は、大膳大夫成忠が宿所、六条西洞院なれば、御所のていしかるべからずとて、礼儀おこなはるべきにあらねば、拝礼もなし。（巻第九 生ズキノ沙汰）
- 2'' 寿永三年正月一日、院の御所は大膳大夫業忠が宿所、六条西洞院なりければ、御所の体し

かるべからざる所にて、礼儀おこなふべきにてあらねば、拝礼もなし。(巻第九第八十一句 宇治川)

- 3 あわれこれわ平家の方に聞こゆる越中の前司かと思ひ、力わ劣つたれども、剛の者であつたによつて、少しも騒がぬ *tei* で、そもそも御辺わ平家の方でわさだめて名ある人でこそあらう。(巻第四第八 大手生田の森の合戦のこと：同じく鶴越を落され、越中の前司が討死のこと.)

- 3[〃] 力はおとつたれども、剛の者にてあるあひだ、すこしもさわがざる体にて、「そもそも御辺は、平家の方にてはさだめて名ある人にてぞおはすらん。(巻第九第八十八句 鶴越)

。斯道文庫本 少モ騒サル躰ニテ

- 4 女房たちこの世わいかにいかにと仰せらるれば、新中納言いと騒がぬ *tei* で、軍わかうでをぢやる。(巻第四第十八 義経教能をたばかつて生け捕ったこと、義経と梶原と戦いに及ばるること：同じく平家の一門ことごとく亡びられたこと.)

- 4[〃] 女房たち、「この世の中は、いかに、いかに」とのたまふ。新中納言いとさわがぬ体にて、「いくさはすでにかう候ふよ。(巻第十一第百五句 早朝)

。斯道文庫本 新中納言イト騒ヌ躰ニテ

。屋代本 新中納言、最騒カヌ体ニテ、(平家一門悉皆滅亡事)

続いて第二のグループ②文脈から帰納されるところを、形式名詞的に集約するという「体」を見る。「*tei*」は、前に「：(コロン)」を持つ。「：」は「即ち」の意を持つ。

(前掲の三国伝記⁺⁻でみれば、「心苦敷ケレ。サレバ此ノテイハ思寄ナキニ似タリ」では、「サレバ」相当部を、天草版平家では「：」で示す。狂言六義かく水では、「哥道のすぐれた人をむこにとらうと存ずる。則此ていを高札にうたばやと存ると云て、」では、「則」相当部の意を「：」で表す。)

- 5 さうして伊豆の国の住人宗茂にあづけられた：その *tei* まことにあわれにごぞった。(巻第四第十二 重衡のあづま下りのこと、同じく千手のまえが沙汰.)

- 5[〃] 伊豆国住人狩野介宗茂にあづけらる。其体、冥途にて娑婆世界の罪人をなぬかなぬかに十王の手にわたさるらんも、かくやとおぼえ哀也。(巻第十 千手前)

- 5[〃] 伊豆の国の住人、狩野介宗茂に預けらる。その体、「冥途にて、娑婆世界の罪人を、七日、七日に十王の手にわたすらんも、かくや」とおぼえてあはれなり。(巻第十第九十四句 重衡東下り)

。屋代本 其体 (同重衡頼朝対面以後狩野介預事)

ここで注目されるのは、「その *tei*」=「其体」ではあるが、後に続く叙述に異なりが見られることである。

5 の *tei* は、『時代別国語大辞典 室町時代編』①外観や態度などからそれと見てとれる、そのものの具体的な様子や様態の「体」ではない。また『日葡辞書』(『邦訳日葡辞書』土井忠夫・

森田武・長南実編訳 岩波書店)の Tei (体・軀) 体裁, 格好, 様子 でもない。高野本の脚注には, 「其体: 捕われの身として公家から武家へと次々に引き渡されて行く様子」とあり, 国会本の頭注には, 「その体 一の谷で捕虜になって以来, 次々と敵の手に移し渡されてゆく様子」とある。したがって「tei」は, ②文脈から帰納されるところを, 形式名詞的に集約した「体」である。天草版平家では, 「:」+「tei」は, 即ち (:), (捕われの身として公家から武家へと次々に引き渡されて行く様子を集約した)「その tei」である。古典平家の其体に続く, 「冥途にて娑婆世界の罪人をなぬかなぬかに十王の手にわたさるらん」は, 天草版平家では排除の対象となり, 天草版平家では簡潔に, 「: その tei まことにあわれにござった。」となる。

(冥途にて以下の注記を, 高野本脚注により記しておく。十王経によると, 亡者は初七日に秦広王, 以後七日ごとに初広王・宋帝王・五官王・閻魔王・變成王と引き渡され, 七七日(四十九日)に泰山王, 百箇日に平等王, 一周忌に都市王, 三周忌に転輪王の前にそれぞれ引き出されて, その罪を裁かれるという。)

③ 新定源平盛衰記第五卷 今は狩野介に預けらる。譬へば娑婆世界の罪人の、冥途・中有の旅にして、七日七日に、十王の手に渡さるらんもかくやと思ひ知られたり。(卷三十九 頼朝重衡対面の事)

6 二人の者ども成親卿の左右の耳に口をあてて、何とやうになりともを声をそつといださせられいと、ささやいて引き伏せ奉ったれば、二声三声ほどをめかれた: その tei あわれなと言うものをろかなことござる。(卷第一第三 成親卿位あらそいゆえに、平家に対し謀叛を企てられたことが顕れ、その身をはじめ、くみしたほどのもの搦め取られ、そのうちに西光とゆうものわ首をうたれたこと。)

6' 二人の者共、大納言の左右の耳に口をあてて、「いかさまにも御声のいづべう候」とさ、やいて、ひきふせ奉れば、二声三声ぞおめかれける。其体、冥途にて、娑婆世界の罪人を、或業のはかりにかけ、或浄頗梨の鏡にひき向けて、罪の軽重に任せつゝ、阿防羅刹が呵責すらんも、これには過じとぞ見えし。(卷第二 小教訓)

6'' 二人の者ども、耳に口をあて、「いかやうにも御声を出だすべう候」とささやきて、もとどりをとつておし臥せたてまつる。二声三声ぞをめかれける。あるいは業の秤にかけ、あるいは浄頗梨の鏡にひきむけ、娑婆世界の罪人を、罪の軽重によつて、阿防、羅刹どもが呵責すらんもかくやとおぼえたる。(卷第二第十三句 多田藏人返り忠 その tei 相当語句欠如)

。屋代本 其体 (重盛卿父禅門諷諫事)

(鹿谷での平家打倒を企てた成親が、その謀議がもれて囚われの身となり、みせかけの叫び声をあげる。)

6 の: その tei は, 5 の: その tei の様式と同じである。したがって天草版平家 6 は, 即ち, 上述の鹿谷での平家打倒の謀議がもれて, 囚われの身となった成親が, みせかけの叫び声をあ

げる様子を集約した「：その tei」である。古典平家の其体に続く、「冥途にて、娑婆世界の罪人を、或業のはかりにかけ、或浄頗梨の鏡にひき向けて、罪の軽重に任せつゝ、阿防羅刹が呵嘖すらんも、これには過じとぞ見えし。」は、天草版平家では排除の対象となり、簡潔に「：その tei あわれなと言うもをろかなこととござる。」と記すのみである。『時代別国語大辞典 室町時代編』には、「哀と言ふもおろかなり」について、次の様にある。「哀れ」と言ってもその心情を十分に表わすことはできないほど、対象が悲惨な状態にあったり、強い感慨を催させたりするさまである。

○曾我九 「親のために命をかるくし、屍は路逕のちまたにすつれども、名をば龍門の雲井にあぐる、あわれといふもおろか也」

○御文章 「野外ニヲクリテ夜半ノ煙トナシハテヌレバ、タダ白骨ノミゾ残レリ。アハレトイフモ中々ヲロカナリ」

後白河上皇の寵臣であり、大納言の位置にある成親が受ける処置は、「あわれなと言うもをろかなこと」である。

(冥途にて以下の注記を、高野本脚注により記しておく。業のはかり：地獄の閻魔庁にある秤で、亡者をのせて生前の罪の軽重をはかるもの。十王経に見える。浄頗梨の鏡：閻魔庁にあり、亡者がこれに向うと生前の悪業がすべて映し出されるという鏡。阿防羅刹：閻魔王の眷属で、阿防は牛頭人手で牛の蹄を持ち鋼鉄のさすまたを携え、羅刹は馬頭で、罪人を苦しめるという。)

7 清盛も面白げに思われて、わごぜわ今様わ上手ぢゃ：この tei でわ舞も定めて良からうず
(巻第二第一 祇王清盛に愛せられたこと：同じく仏という白拍子に思いかえられてのち、親子三人尼になり、世を厭うたことと、またその仏も尼になったこと。)

斯 入道モ面白ケニ思ヒ玉ヒテ和御前ハ今様ハ上手ニテ有ケルヤ此ノ躰ニテハ舞モ定テ能カル
ラン (巻第一第三句 義王)

天草版平家の「この tei」に対応する「此ノ躰」を有するのは、斯道文庫本である。5 の：その tei, 6 の：その tei と様式を同じくするものである。異なるのは、5 の：その tei まことにあわれにござった。6 の：その tei あわれなと言うもをろかなこととござる。のように、「冥途にて」以下の古典平家の仏教的な要素を排除し、評語を加えることなく、7 の「：この tei」前後は古典平家との変化は認められないことである。5・6におけるさりげない仏教要素の排除が目される。

③ 高野本 このぢゃうでは、舞もさだめてよかるらむ。

葉子十行本 此の定では舞もさだめてよかるらん。

国会本 この定にては舞もさだめてよかるらん。

屋代本 此様ニテハ、舞モ一定ヨカル覧。(義王義女仏閉事同出家事)

延慶本 「今様ハ上手ニテヲハシケリ。舞ハイカニ」ト宜ケレバ (一 (第一本) 七 義王

義女之事)

長門本 不載

tei = 体では、「:」 + 「tei」の天草版平家の表現上・表記上の工夫が注目される。

四 「:」 + 「tei 文」

前述の三 tei = 体につき、「:」 + 「tei 文」に注目する。天草版平家独自の表記上の特徴、ローマ字表記による工夫が見られる。すでに三 tei = 体において、「千手前」・「小教訓」・「義王」の「:tei 文」について触れている。ここでは古典平家4本と対応の見られなかった「:tei 文」を見る。

まず整理結果表を示す。

天 草 版	句	国 会 本	斯道文庫本	卷	高 野 本	葉子十行本
卷第一・三	13	多田の蔵人返り忠	13 多田蔵人還忠	2	小教訓	○ 小教訓
卷第二・一	5	義王	3 義王	○ 1	祇王	妓王
卷第三・五	67	平家の一門願書	67 平家一門願書	7	平家山門連署	連署
卷第四・六	84	六箇度のいくさ	84 六ヶ度軍	9	樋口被討罰	樋口誅
卷第四・十二	94	重衡東下り	○ 94 重衡東下	○ 10	千手前	○ 千手
		1	2		2	2

天草版平家卷第三第五（木曾軍の評定をして比叡の山を語らわれるれば、すなわち比叡の山も木曾にくみし、平家をそむいたこと：並びに平家西国の合戦にわ勝利を得られたこと。）および巻第四第六（源平大手、搦手の大将を分けられて、義経わ三草の合戦にうち勝って、また鶴越えかかれたこと。）を見る。これら是对應する「体」が古典平家には認められないが、4本（国会本・斯道文庫本・高野本・葉子十行本）の当該箇所を示す。

最初に、巻第三第五から見ることにする。

(天) 年来日ごろの振舞いがそでなかったによって、祈れども、かなわず、語えども、靡かず：弓折れ矢尽きた tei であったによって、衆徒これを見て、まことにさこそとあわれに思うたれども、

(国) 年ごろ、日ごろのふるまひ、神慮をそむき、人ののぞみにも違ひければ、祈れどもかなはず、かたらへどもなびかず。大衆これを見て、「まことにさこそ」とは憐みけれども（巻第七第六十七句 平家の一門願書）

(斯) 年来日此ノ振舞神慮ヲ背キ違_二人望_一ケレハ祈レトモ叶ハス、語合ヘトモ靡カス。大衆是ヲ見テ真ニサコソトハ哀ミケレ共（巻第七第六十七句 平家一門願書）

(高) 年ごろ日比のふるまひ、神慮にもたがひ、人望にもそむきにければ、いのれどもかなはず、かたらへ共なびかざりけり。大衆、まことに事の体をば憐みけれ共（巻第七 平家山門

連署)

(葉) 年来日来の振舞、神慮にも違ひ、人望にも背きにければ、祈れども叶はず、語らへども靡かざりけり。大衆誠に事の体を憐みけれども (巻第七 連署)

古典平家4本ともに、天草版平家の「：弓折れ矢尽きた *tei* であったによって」を有していない。天草版独自の *tei* 文挿入である。北陸で大敗し、義仲軍の進攻が間近に迫る平家が、山門に願書を送った。しかし源氏への協力を約した後の、ひたすらに同心を嘆願する一門連署ではあったが、山門は源氏への同心を翻さなかった。このような平家の万策尽きてもはや手の打ちようがない様を、「：」即ちと示し、弓折れ矢尽きた *tei* と表現する一句は効果的である。編者不干ハビヤンの外国人宣教師に対する日本語の理解・文意把握を容易にする配慮がうかがえる。なお『天草版金句集』に、*Yumi vore, ya tçuqu. Cocoro. Nantomô xôyôga nai.* が見られる。また、「振舞いがそでなかった：(天)」⇐「神慮をそむき、人ののぞみにも違ひければ：(高)」とする表現上の工夫も注目されるところである。

参考のために二・三の古典平家の当該箇所をあげておく。

。屋代本 年来日比ノ振舞背_レ神慮_一、違_レ人望_一ケレバ、祈レドモ不_レ叶、語ヘトモ不_レ靡。

大衆見_レ之、誠ニサコソト憐ミケレ共 (巻第七 平家一門人々山門願書事)

。延慶本 年来日来ノ振舞、神慮ニモ叶ワズ、人望ニモ背キハテシカバ、力不及。既ニ源氏同心ノ返牒ヲ送り、カロガロシク今又其議ヲ改ルニアタハズ。誠ニサコソハトテ、事ノ躰ヲバアワレミケレドモ、許容スル衆徒モナカリキ。(七(第三末)十九 平家送山門牒状事)

。長門本 としころ日比のふるまひ、神慮にもかなはず、人望も、そむきはてしかは、ちらおよはず。「すてに、源氏同心の返牒ををくる。かるかるしく、いま又、其儀を変にあたはず。まことに、さこそは」とて、大衆、事のよしを、あはれみけれとも、許容する衆徒も、なかりけり。(巻第十四 平家山門ニ牒状ヲ遣事)

続いて、巻第四第六を見る。

(天) 高い所にわ赤旗その数を知らず立て並べたれば、春風に吹かれて天に翻れば、ひとえに火焰の燃ゆるに異ならず：まことにをびたたしい *tei* でござったと申す。

(国) 高き所には赤旗ども、その数を知らず立て並べたれば、春風に吹かれて天にひるがへれば、ひとへに火炎の焼けのぼるにことならず。まことにおびたたしかりけり。(巻第九第八十四句 六箇度のいくさ)

(斯) 高き処ニハ赤旗其数ヲ知ラス立双ヘタレハ春風ニ吹レテ天ニ翻ハ偏ニ火焔ノ燃ルニ異ラス誠ニ震シカリケリ (巻第九第八十四句 六ヶ度軍)

(高) たかきところには、赤旗おほくうち立てたれば、春風に吹かれて天に翻るは、火炎のもえあがるにことならず。(巻第九 樋口被討罰)

(葉) 高き所には、赤旗多く打ち立てたれば、春風に吹かれて、天に翻るは、火炎の燃え上がる

に異ならず。(巻第九 樋口誅)

古典平家4本は、二グループに分けることができる。国会本・斯道文庫本の百二十句系統本は、「まことにおびたたしかりけり」を持っている。天草版平家ではこれが「：まことにをびたたい tei でござったと申す。」となり、天草版平家と百二十句系等本との近さを示すことになる。殊に百二十句系統本の斯道文庫本は、古典平家中唯一、巻第二第一＝巻第一第三句 義王＝：この tei でわ＝此ノ躰ニテハと対応関係が認められる。一方、高野本・葉子十行本の覚一系統本は、「火炎のもえあがるにことならず」とあり、「：まことにをびたたい tei でござったと申す」相当部分が欠如している。国会本巻第九第八十四句六箇度のいくさは、平家が正月中旬(寿永三年)より屋島から難波潟に移り、一の谷に城を築き、山陽道八ヵ国、南海道六ヵ国の十四ヵ国を従えたと、はじまる。これから語られる一の谷合戦の序幕となり、激しい戦いの展開を予想させる叙述である、「：まことにをびたたい tei でござったと申す。」が効果的である。

参考のために、延慶本・長門本の当該箇所をあげておく。

- ・延慶本 赤旗其数不知立置タリケレバ、春風ニ吹レテ天ニ翻リ、火焰ノ立アガルガ如シ。誠ニヲビタ、シ。敵モ憶シヌベクゾ見ヘケル。(九(第五本)十五 平家一の谷ニ構城塙事)
- ・長門本 あかはた、そのかすをしらす、たてならへたりければ、春風にふかれて天に翻は、火焰のもえあかるかことし。まことにおひた、しく、かたきもおくしぬへくそ見えける。(巻第十六 能登守教経所々合戦事)

「：」＋「tei 文」は、ローマ字書きの利点を生かした天草版平家の特徴が、注目される場所である。

五 tei 文挿入

前述の四「：」＋「tei 文」に続き、「tei 文挿入」に注目する。天草版平家独自のローマ字表記の特徴を活かし、「：」の働きと、文脈から帰納される場所を、形式名詞的に集約するという「tei (体)」とを組み合わせることによる効果的な表現を見てきた。すでに四「：」＋「tei 文」において、巻第三第五(木曾軍の評定をして比叡の山を語らわれば、すなわち比叡の山も木曾にくみし、平家をそむいたこと：並びに平家西国の合戦にわ勝利を得られたこと。)の「：弓折れ矢尽きた tei であったによって、」は触れている。ここでは古典平家10本と対応の見られなかった「tei 文挿入」を見ることにする。

まず整理結果表を示す。

天草版	句	国会本	斯道文庫本	屋代本	竹柏園本	鎌倉本
卷第三・五	67	平家の一門願書	平家一門願書	平家一門人々 山門願書事	木曾義仲山門 工牒状事并返 牒事	平家一門人々 山門願書事
九	71	四の宮即位	④ 新帝御即位事	四宮御讓位事	新帝御即位事	新帝御即位事
十	73	緒環	④ 平家太宰府落事	豊後国住人緒 方三郎惟義事	平家太宰府落 給事	平家太宰府落事
十	〃	〃	〃	〃	〃	〃
十	74	柳が浦落ち	④ 〃	〃	左中将清経入 水事	〃
卷第四・一	80	義経熱田の陣	④ 義仲与平家内 通事	法住寺殿合戦事	木曾停官職事	義仲与平家内 通事

(第八欠巻)

天草版	巻	高野本	葉子十行本	流布本	延慶本	長門本
卷第三・五	7	平家山門連署	連署	平家山門への 連署	七(第三末)十九 平家送山門牒状事	卷第十四 平家山門二牒状ヲ遣事
九	8	名虎	山門御幸	那都羅	八(第四)二 平家一類百八十 余人解官セラル、事	卷第十五 高倉院四宮御即位 事
十		太宰府落	太宰府落	太宰府落	八(第四)十二 尾形三郎平家於 國中ヲ追出事	卷第十五 平家山鹿城着給事
十		〃	〃	〃	〃	〃
十		〃	〃	〃	八(第四)十三 左中将清経投身給事	卷第十五 小松左中将清経入海事
卷第四・一		法住寺合戦	法住寺合戦	法住寺合戦	八(第四)卅七 法皇五条内裏ヨリ出 サセ給テ大勝大夫業 忠ガ宿所へ渡セ給事	卷第十五 頼朝遣牒状於山門事

天草版	挿入されたtei文
卷第三・五	：弓折れ矢尽きたteiであったによって、
九	まことにきのうわ今日に変わる世の中のteiわあわれにござる。
十	み足から流るる血わ砂を染めてそのあわれなteiわ
十	言語に述べられぬteiでござった。
十	平家の運のつきたteiを見かぎって、
卷第四・一	その時天下のteiわ大方三つに分かれたやうなものでござった。

※古典平家10本すべてにおいて、天草版平家「挿入されたtei文」は見られない。

観察を行う天草版平家の各章段を先に示すことにする。卷第三第九（法皇鞍馬の寺から比叡の山へ還行あったことと、平家の西国へ落ちられてからのこと。）、卷第三第十（院宣によって豊後の緒方平家に対し謀叛を起すによって、平家あつかわれるれどもかなわず：ついに大宰の府にもえたまられいで、かちはだして落ちさまよわれたことと、屋島の内裏づくりのこと。）および卷第四第一（頼朝木曾が悪行を聞いてそれをしづむるために、代官として弟の範頼と、義経をのぼいてそれをしづめうとせらるるを聞いて、木曾平家と一味をしょうとつかいをたてたれども、平

家同心せられなんだこと.) を見ることにする。これらには天草版平家「tei 挿入文」と対応する「体文」が古典平家には認められないが、5 本（国会本・斯道文庫本（巻第八は欠本のため小城鍋島文庫本にかえる）・高野本・葉子十行本・長門本）の当該箇所を示す。

最初に、巻第三第九から見ることにする。

(天) その日平家わまた百六十人内裏のを札をけづりのけられたと、聞こえまらした。まことにきのうわ今日に変わる世の中の tei わあわれにござる。

(国) 同じく十四日、前の内大臣宗盛以下の平家の一類百六十三人が官職を罷めて、殿上の御簡をけづられけり。見る人涙をながさずといふことなし。そのなかに平大納言時忠、内蔵頭信基、讃岐の中将時実、この三人はけづられず。これは「三種の神器ことゆゑなく返し入れたてまつれ」と、かの大納言のもとへ仰せ下さるるによつてなり。（巻第八第七十一句 四の宮即位）

(小) 同キ十四日前内大臣宗盛以下ノ平家ノ一類百六十三人カ官職ヲ止メテ殿上ノ御札ヲ削ラレケリ見ル人涙ヲ流サスト云事ナシソノ中ニ平大納言時忠内蔵頭信基讃岐ノ中将時実此三人ハ削ラレズ（略）（巻第八 新帝御即位事）

(高) 同十六日、平家の一門百六十余人が官職をとめて、殿上のみふだをけづらる。其中に、平大納言時忠・内蔵頭信基・讃岐中将時実、これ三人はけづられず。（略）（巻第八 名虎）

(葉) 同じき十六日、前内大臣宗盛公以下、平家の一類百六十人が官職を停めて、殿上の御簿を削らる。其の中に、平大納言時忠卿・内蔵頭信基・讃岐中納言時實、是三人は削られず。（略）（巻第八 山門御幸）

(長) 六日、平家の一類、公卿、殿上人、衛府、諸司、百八十人、官をとめらる。時忠卿父子三人は、此うちにもれにけり。（略）（巻第十五 高倉院四宮御即位事）

上記の5本ともに、天草版平家の「まことにきのうわ今日に変わる世の中の tei わあわれにござる。」を有していない。整理表にのせた他の諸本にも、この tei 文挿入は無い。ただし、延慶本に、「昨日マデハ平家ノ所縁境界ニ至ルマデ、人恐ル、事如虎。今日ヨリハ人ヲ恐ル事如鼠也。」（八（第四）二 平家一類百八十余人解官セラル、事）が見られることに注意しておきたい。忠盛の昇殿（巻第一 殿上闇討）からはじまる、清盛をはじめとする平家一門の威勢繁栄が、ついに「内裏のを札をけづりのけられた」にいたることを、「まことにきのうわ今日に変わる世の中の tei わあわれにござる。」と「tei 文」を挿入することにより、まとめあげている。平家物語の構成上においては、転換点に直面するところと言えよう。

続いて、巻第三第十を見る。

(天) 緒方三万余騎で寄すると聞こえたれば、とるものもとあえず、大宰の府え平家の侍どもわみな落ちて帰られたが、それにもえたまらいで、主上をば奥に召させ、国母をはじめてやごとな女房たち袴のそばをとり、宗盛なども狩衣のそばを高うさしはさうで、われ先にと徒跣で落ちさせらるるに：をりふし雨が降って車軸を流せば、吹く風わ砂をとばして、目口

に入れば、落つる涙と、降る雨わいづれをいづれと見分けられなんだ。けわしい所どもを歩かせらるることをばいつ習わせられうぞなれば、み足から流るる血わ砂を染めてそのあわれな tei わ言語に述べられぬ tei でござった。

(国) 平家は、「緒方の三郎維義が、三万余騎にて、すでに寄する」と聞こえしかば、取るものも取りあへず、大宰府をこそ落ち給へ。(中略) 宮崎、香椎、宗像伏し拝み、主上、垂水山、鶉浜などといふ嶮難をしのがせ給ひて、渺々たる平地へぞおもむかれける。いつならはしの御ことなれば、御足より出づる血は、砂を染め、紅の袴は色を増し、白き袴は裾紅にぞなりにける。かの玄奘三蔵の流沙葱嶺をしのがれけんも、いかでかこれにはまさるべき。されどもそれは求法のためなれば、来世のたのみもありけん。これは怨敵のゆゑなれば、後世のくるしみ、かつ思ふこそかなしけれ。(巻第八第七十三句 緒環)

(小) 平家ハ緒方三郎惟義カ三万余騎ニテ既ニ寄ルトキコヘシカバ取ルモノモトリアヘズ太宰府ヲコソ落玉ヘ(中略)折節降雨雨車軸ノ如ク吹風沙ヲ上クルトカヤ落ル涙降雨雨分キテ何レモ見ヘサリ梟彼ノ玄奘三蔵ノ流沙葱嶺ヲ凌レケン苦ミモ是ニハ過シトゾミエシサレドモソレハ求法ノ為ナレバ来世ノ頼モ有ケン是ハ怨敵ノ故ナレバ後世ノ苦ミヲ且ツ思フコソ悲シケレ(巻第八 平家太宰府落事)

(高) (前 略) たるみ山・鶉濱などいふ嶮々たる嶮難をしのぎ、渺々たる平沙へぞおもむき給ふ。いつならはしの御事なれば、御足より出づる血は沙をそめ、紅の袴は色をまし、白袴はすそ紅にぞなりにける。彼玄奘三蔵の流沙葱嶺を凌がれけんくるしみも、是にはいかでまさるべき。されどもそれは求法のためなれば、自他の利益もありけん。是は怨敵のゆゑなれば、後世のくるしみかつおもふこそかなしけれ。(巻第八 太宰府落)

(葉) (前 略) 垂水山・鶉濱などいふ峻しき嶮難を凌がせ給ひて、渺渺たる平沙へぞ赴かれける。何時習はしの御事なれば、御足より出づる血は、沙を染め、紅の袴は色を増し、白き袴は裾紅にぞなりにける。されば彼の玄奘三蔵の流沙・葱嶺を凌がれけむ悲しみも、是には争勝るべき。それは求法の為なれば、自他の利益もありけん、是は闘戦の道なれば、来世の苦しみ且思ふこそ悲しけれ。(巻第八 太宰府落)

(長) (前 略) 折節降雨は車軸を流し、吹風いさごをあぐ、住吉の社を左にし宮崎の松原に一夜明、あくる日香椎、宗像など、伏拜みて、みちのたよりの法施にも立願の心ざし、主上今一度旧都の行幸のみぞ被_レ申ける、されども前業の致す處なれば、今生の感応むなしきに似たり、雨もなみたも、いづれともみえわかず、鳥にもあらねば、天にかけらす、龍にあらねば、雲へものぼりがたし。彼玄奘三蔵の、流砂葱嶺を凌がれけるも、是にはいかでか増るべき、かれは求法のためなれば、後生菩提の資糧也、是は順業の悲みなれば、来世の苦輪頼みなし。(巻第十五 平家山鹿城着給事)

太宰府落の章段、諸本間の相違が見えるように長い引用文となった。維義が三万余騎で押し寄せ、太宰府を車軸のごとく降る雨の中を落ちゆく平家一門の叙述には鬼気迫るような異常性が満

ちてくる。上記の5本ともに、天草版平家の「(み足から流るる血わ砂を染めて) そのあわれな tei わ言語に述べられぬ tei でござった。」を有していない。整理表の他の諸本にも、見られない。

このような「tei」は、ロドリゲス『日本大文典』(土井忠生訳註 三省堂)の「Tei (体)は動詞の示す意味に関して異常な状態にあることを表す。」および、コリヤード『日本文典』(大塚高信訳 風間書房)の「tei (体)は異常な様子および驚嘆の理由を意味する」に相当するものと言える。

卷第三第十には、次のような「tei 文挿入」が見られる。

(天) 小松殿の三番目の子の清重とゆう人わ平家の運のつきはてた tei を見かぎって、網にかかった魚のやうにしてわいらぬことぢやと思われたか、月夜に心を澄まいて、船の屋形にたちでて笛などを吹いて遊ぶていにもてないて、海えざっと沈んで死なれたれば、男女泣き悲しゅうだれども、甲斐もをりなかった。

(国) 小松殿の三男左中将清経は、ある夜船の屋形にたち出でて、なにごとに思ひ入り給へる人にて、心をすまし、横笛の音とり朗詠して、こしかたゆく末のことども、のたまひつづけて、「都をば源氏がために追ひ落され、鎮西をば維義がために攻め落され、網にかかれる魚のごとし。いづちへ行かばのがるべきかは。ながらへはつべき身にあらず」(卷第八第七十四句 柳が浦落ち)

(小) 小松殿ノ三男左中将清経ハ月ノ夜ヲ澄シツ、船ノ屋形ニ立出テ、何事ニモ思入玉ヘル人ニテ心ヲ澄シ笛ヲ音取り朗詠シテ来方行末ノ事共宣ヒツ、ケテ都ヲハ源氏カ為ニ追落サレ鎮西ヲバ惟義カ為ニ責落サレ網ニカ、ル魚ノ如シ(卷第八 平家太宰府落事)

(高) 小松殿の三男左の中将清経は、もとより何事もおもひ入れたる人なれば、「宮こをば源氏がために攻め落され、鎮西をば維義がために追出さる。網にかゝれる魚のごとし。(卷第八 太宰府落)

(葉) 小松殿の三男左中将清経は、もとより何事も深う思ひ入り給へる人にておはしけるが、月の夜心を澄まし、船の屋形に立ち出で、横笛音取り朗詠して遊ばれけるが、「都をば源氏が為に責め落され、鎮西をば維義が為に追ひ出ださる。網に懸れる魚の如し。(卷第八 太宰府落)

(長) 小松内大臣の三男左中将清経、都をば源氏に追落され、鎮西をば伊能に追出され、いづくへ行たらばかなふへきや、終には不_レ可_レ遁_ルとて、閑に御経読念仏申て海へぞ沈給ひける人々惜み給けれどもかひなし(卷第十五 小松左中将清経入海事)

天草版平家卷第三第十の「tei 文挿入」は、「平家の運のつきはてた tei を見かぎって」である。これは上記5本の古典平家では、「都をば源氏がために追ひ落され、鎮西をば維義がために攻め落され」(国会本)相当部に対応する。前述のように『天草版平家物語』は、キリスト教布教のために来日した当時のイエズス会宣教師のための、日本の歴史と日本語学習のためのテキストである。したがって古典平家の「都をば源氏がために追ひ落され、鎮西をば維義がために攻め

落され」を、文脈から帰納される「平家の運のつきはてた **tei** を見かぎって」と、**tei** 文に置きかえて挿入することにより、日本語学習者の理解を容易にすることができる。なおこの章段は、日ごろから思い詰め勝ちである重盛の三男左中将清経が、月明の夜、笛を吹き、読経し、念仏して入水したとするものである。清経の死は、重盛・維盛の死とも重なり、平家物語の中では印象的である。

さいごに巻第四第一を見る。

- (天) 法皇も五条の内裏を出させられて、大膳大夫とゆう者が宿所に御自由にござって、思い思いに人をも位に上げさせられ、まづはや思し召すまなる心であつた。その時天下の **tei** わ大方三つに分かれたやうなものでござつた。平家わ西国に居られ、頼朝わ関東にあれば、木曾わ京に居ていろいろのことをする
- (国) 同じき十二月五日、法皇は五条の内裏より大膳大夫業忠が宿所、六条の西洞院へ御幸なる。同じき十三日、歳末の御修法あり。やがて除目おこなはるる。木曾がはかりごとにて、人々の官ども思ふ様になりにけり。(中 略) 平家は西国に、兵衛佐は東国に、木曾は都にて張行し、諸国七道みな乱れて、おほやけの貢物をも奉らず、わたくしの年貢ものぼらねば、京中の人々は、ただ魚の水に離れたるに異ならず。(巻第八第八十句 義経熱田の陣)
- (小) 同ク十二月五日法皇ハ五條ノ内裡ヨリ大膳大夫業忠カ宿所六條ノ西ノ洞院へ御幸ナル同十三日歳末ノ御修法アリ懸テ除目行ハル木曾計事ニテ人々ノ官共思フヨウニ成リニケリ(中略) 平家ハ西国ニ兵衛佐ハ東国ニ木曾ハ都ニテ張行シ(巻第八 義仲与平家内通事)
- (高) 同十二月十日、法皇は五条内裏を出でさせ給ひて、大膳大夫成忠が宿所、六条西洞院へ御幸なる。同十三日、歳末の御修法ありけり。其次に叙位・除目おこなはれて、木曾がはからひに、人々の官ども思ふさまになしをきけり。平家は西国に、兵衛佐は東国に、木曾は宮こにはりおこなふ。(巻第八 法住寺合戦)
- (葉) 同じき十二月十日、法皇をば五條内裏を出だし奉て、大膳大夫成忠が宿所六條西洞院へ御幸なし奉る。聽て其の日歳末の御修法始めらる。同じき十三日除目行はれて、木曾が計らひに、人人の官加階共思ふ様になしおきてんげり。平家は西国に、兵衛佐は東国に、木曾は都に張り行ふ。(巻第八 法住寺合戦)
- (長) 十二月十日は、法皇五条の内裏をいでさせ給て、大膳大夫業忠が六条西洞院へわたされ給にけり、かくてその日より歳末の御懺法は始められけり、同十三日木曾除目を行ておもふさまに官途も成てけり。(中略) 平家はおちたれども、源氏は未だうちいらず、其中間によしなか行家二人して、京中をほろぼしけるも、いつまでとおぼえて、あやうくこそ見えけれ(巻第十五 頼朝遣牒状於山門事)

この天草版平家巻第四第一の「**tei** 文挿入」は、「その時天下の **tei** わ大方三つに分かれたやうなものでござつた。」である。この **tei** 文に続く「平家わ西国に居られ、頼朝わ関東にあれば、木曾わ京に居ていろいろのことをする」は、古典平家に見られるものである。巻第三第十の「**tei**

文挿入」と同じく、日本語学習者であるイエズス会宣教師の理解を助けるための「tei 文」である。前の「tei 文」と異なるのは、まったく新たな tei 文であることである。寿永二年の年の暮は、「平家わ西国に居られ、頼朝わ関東にあれば、木曾わ京に居ていろいろのことをする」という情勢のうちに過ぎ去ろうとしている。しかしこの三者の対立は、長くは続かなかった。

五 tei 文挿入は、天草版平家巻第三において注目される。「tei 文挿入」箇所は、6 ヲ所に見られるが、巻第一・巻第二では皆無である。巻第三において5 ヲ所に出現し、残りの1 ヲ所は巻第四において出現している。高野本で見れば、巻第七 平家山門連署に1 例、後は巻第八に見られる。殊に「太宰府落」には3 例の「tei 文挿入」が見られる。平家物語の内容とも相俟って「tei 文挿入」の効果は、一種の調子を作り出している。「弓折れ矢尽きた tei であったによって」・「まことにきのうわ今日に変わる世の中の tei わあわれにござる」・「(み足から流るる血わ砂を染めて) そのあわれな tei わ言語に述べられぬ tei でござった」・「平家の運のつきた tei を見かぎって」・「その時天下の tei わ大方三つに分かれたやうなものでござった」等の新たに加筆された「tei 文」の挿入は、天草版平家編者不干ハビヤンの手によるものである。

六 おわりに (まとめとして)

これまで述べてきたことの要点を、箇条書きにしてまとめておく。視点は『天草版平家物語』と古典平家(高野本・国会本・他9本)の特徴を、「tei (体)」を通して吟味することにある。

1 tei (体) の出現度の多寡は、巻により異なる。また、その表現上の特徴も巻により差異が認められる。

- 巻第一に多く出現する「tei」は、“外観や態度などからそれと見てとれる、そのものの具体的な様子や様態”をあらわすものである。(『日葡辞書』Tei 体裁, 格好, 様子) 多用により語調が整う。

- 巻第四では、評語を伴った「tei」により、表現上の深まりが見られる。(もの寂しい tei, あわれな tei 等)

2 tei (体) の出現度には、古典平家諸本間に差異が見られる。

- 百二十句系統本(国・斯) > 覚一系統本(高・葉)
- 斯道文庫本の tei 出現度が、注目される。

3 文体上の特徴から見た「tei」の効果

- 「: コロン」+ 「tei 文」の表現上の特徴は、ローマ字表記の利点を活かしたものである。

(例) 年来日ごろの振舞がそでなかったによって、祈れども、かなわず、語えども、靡かず：弓折れ矢尽きた tei であったによって、衆徒これを見て、まことにさこそとあわれに思うたれども(巻第三第五)の「: 弓折れ矢尽きた tei」は、古典平家には見られない。天草版独自の加筆によるものである。北陸で大敗し、義仲軍の進攻が間近に迫る平家が、山門にひた

すら同心を嘆願する願書を送った。しかし源氏への協力を約した後であったため、山門は源氏への同心を翻さなかった。このような平家の万策尽きてもはや手の打ちようがない様を、「：」＝「即ち」、「tei」＝“文脈から帰納されるところを、形式名詞的に集約する”パターン、「：弓折れ矢尽きたtei」は、緊迫感・緊張感をもたらし効果的である。天草版平家の編者不干ハビヤンが、外国人宣教師に対して日本語の理解・文意把握を容易にするために加筆した一文である。

。新たな「tei 文」を挿入する。

(例) その日平家わまた百六十人内裏のを札をけづりのけられたと、聞こえまらした。まことにきのうわ今日に変わる世の中のtei わあわれにござる。(巻第三第九) 忠盛の昇殿(巻第一 殿上聞討)からはじまる平家一門の威勢繁栄が、ついに「内裏のを札をけづりのけられた」にいたる。平家物語の構成から見れば、転換点に直面するところである。ここに古典平家には見られない「まことにきのうわ今日に変わる世の中のtei わあわれにござる。」と「tei 文」をあらたに加筆する天草版平家編者不干ハビヤンの配慮、日本語・日本文把握を容易にする工夫が見られる。

。「弓折れ矢尽きたteiであったによって」・「まことにきのうわ今日に変わる世の中のtei わあわれにござる」・「(み足から流るる血わ砂を染めて) そのあわれなtei わ言語に述べられぬtei でござった」・「その時天下のtei わ大方三つに分かれたやうなものでござった」等の、新たに天草版平家に加筆された「tei 文」の挿入は、平家物語の内容とも相俟って、一種の調子を作り出している。

参考図書

『天草版平家物語対照本文及び総索引』江口正弘・明治書院

『平家物語』新潮日本古典集成 新潮社

『百二十句本平家物語』汲古書院

『屋代本高野本対照平家物語』新典社

『鎌倉本平家物語』古典研究会

『平家物語 竹柏園本』八木書店

『平家物語』新日本古典文学大系 岩波書店

『平家物語』日本古典全書 朝日新聞社

『平家物語』おうふう

『延慶本平家物語』勉誠社

『平家物語長門本』名著刊行会

『小城鍋島文庫本平家物語』汲古書院

『邦訳日葡辞書』岩波書店

『時代別国語大辞典 室町時代編』三省堂

ロドリゲス『日本大文典』三省堂

コリヤード『日本文典』風間書房

(2007年9月26日受理)